

# MUSEUM

ミュージアム・アイズ

# EYES

Mm  
MEIJI UNIVERSITY  
MUSEUM

Vol. 68  
2017

特集

## 博物館資料で日本一周!!



### Contents

- 博物館活動報告 — 公開特別講義 工芸のサービスデザイン：アイデアの創造と編集 他
- 展示&リサーチ — 再葬墓と甕棺墓 弥生の墓の東西
- 市民レクチャー — 伝統的工芸品の現代マーケティング—商品としての将来性と分業体制について
- 学芸研究室から — 転封こぼれ話 ~旅立つ人、残る人、涙の別れ~
- 収蔵室から — 前場幸治瓦コレクション 飛鳥時代の瓦②  
記念館前遺跡出土の肥前産「京焼風陶器」
- 南山大学協定通信 / 博物館入館者数の動き / 団体見学の記録 / M2カタログ / 博物館友の会から

# 博物館資料で日本一周!!

明治大学博物館には、20万点を超える資料が収蔵されています。それらは研究のための資料として収集されたものですが、さまざまな分野や時代にまたがるのはもちろんのこと、地域的にも関東にとどまらず日本全国にわたっており、明治大学が手掛けてきた研究の幅広さを示しています。今回は、当館収蔵の47都道府県を代表する資料をご紹介します。常設展示室に展示されているものもありますので、みなさんゆかりの地域の資料を探してみましょう。さあ、『ミュージアム・アイズ』片手に博物館資料で日本一周!!



## 京都府：伝・京都町奉行所与力銀着せ十手

京都市／江戸時代

収蔵庫

十手は元来役所から支給される官給品で、本品は京都町奉行所の与力が使用した十手と言われている。

## 広島県：宮島細工 杓子

廿日市市／2001年収集

ご飯をよそう道具は大型化して“敵をめしとる”必勝の護符として野球応援や選挙で活躍。

## 島根県：袖師焼 酒器揃

松江市／1965年収集

山陰は民藝の窯元が多く分布。ブームの時代、素朴で確かな技法が都市住民に受容された。

## 福岡県：板付遺跡 福岡市博多区／弥生時代

稲作開始期の遺跡。常設展示の壺や甕は教科書にも登場する。



## 長崎県：踏絵 (レプリカ)

長崎市／年代不詳 収蔵庫

宗門改の際、キリシタン信仰の持ち主でない事を証明するために踏ませた。



## 鳥取県：因州和紙 レターセット

鳥取市／1965年収集

ポピュラーな和紙利用の現代的アレンジ。ネット時代においても味いは捨てがたい。



## 奈良県：

## 東大寺 珠文縁複弁八葉

奈良市／奈良時代

前場幸治瓦コレクション。長野でも同じ型で作られた瓦があり、方へ製作者が派遣されていた。

## 佐賀県：伊万里焼 桜花文飾皿

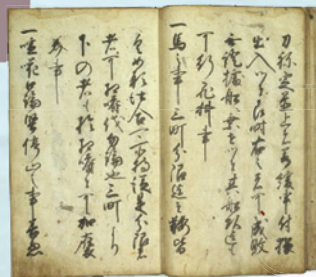
伊万里市／2013年収集

色鍋島は佐賀藩主鍋島家による将軍への献上品などに用いたデザイン。和様の絵付も特徴。

## 熊本県：甕棺

上益城郡御船町／弥生時代 収蔵庫

全長93cmに達する土製の棺。弥生時代の北部九州を中心に使われた。



## 宮崎県：延岡城下家中屋敷割図

延岡市／延享4年(1747)以降 ※写真は部分

収蔵庫

延岡城は慶長期に高橋元種が築城した。城主は高橋氏、有馬氏、三浦氏、牧野氏と代わり、延享4年に内藤家が城主となった。

## 愛知県：赤津焼

素焼きの上に酸化第2

### 山形県：天童将棋駒

天童市／1980年収集

将棋駒と言えば天童市の代名詞。柘の木を素材に漆で文字を描く。



### 北海道：白滝服部台遺跡

紋別郡遠軽町／旧石器時代

黒曜石産地周辺に広がる列島最大規模の石器生産遺跡。白滝型細石核は製作技術が北方系であることを示す。



### 青森県：亀ヶ岡遺跡 遮光器土偶

つがる市／縄文時代

考古部門一番人気。毎年他館から出張依頼が来る。ほぼ完全な形で残っている貴重な例で、頭部には赤い顔料が残る。

### 福島県：奥州岩城平之城絵図

いわき市／延享4年(1747)以前 **収蔵庫**

岩城平藩の城。延享4年まで譜代大名内藤家が領主だった。

### 栃木県：出流原遺跡 顔面付壺

佐野市／弥生時代

注ぎ口を顔の口に見立てた全国でも数例しかない特殊な形状の土器。骨壺として使用された。国指定重要文化財。



### 千葉県：安房国内14ヶ村の村絵図

南房総市・鋸南町／明治元年(1868) **収蔵庫**

山は緑に海・川が青、黄の水田に赤い畑が鮮やかな村絵図。珍しい漁村の絵図を含む。

### 石川県：

#### 輪島塗 金蒔絵屠蘇器揃

輪島市／2006年受贈

豪華なバブル経済期の製品。1990年代の不況下、こうした漆器の需要は急速にしばらくだ。



### 長野県：矢出川遺跡

南佐久郡南牧村／旧石器時代

日本列島にも細石刃石器群が存在することを初めて明らかにした。



### 蓮華文軒丸瓦

**収蔵庫**

県信濃国分寺中央から地とを示す。



### 高知県：長宗我部氏掟書

慶長元年(1596)

土佐国の戦国大名長宗我部氏が領国統治のために定めた分国法。



### 東京都：牢内深秘録

中央区／江戸時代

小伝馬町牢屋敷のしきたりを記した書で、牢内の教え八ヶ条、および牢内関係条目五〇項目が収録されている。

### 茨城県：三昧塚古墳 甲冑

行方市／古墳時代

鉄板を鋸で留めた新式の武装。右脇の蝶番金具はかつて金銅色に輝いていた。霞ヶ浦北岸の王の威厳をしのぼせる。



### 飾皿製造工程見本 瀬戸市／1996年収集

鉄で絵付け。焼成により銅緑釉が発色、透明釉の下に鉄絵が顕れる。

残りは次のページ!

博物館資料で  
日本一周!!**岩手県：雨滝遺跡** 二戸市／縄文時代

亀ヶ岡式土器の優品や土偶、岩版、石棒、ミニチュア土器など東北晩期の縄文文化を代表する遺跡。

**宮城県：山王遺跡** 栗原市／縄文時代

縄文時代晩期後半の土器編年研究で重要な遺跡。土偶や土版、玉類も出土。\*国指定史跡としては「山王田遺跡」の名称が用いられている。

**秋田県：大湯遺跡 注口土器** 鹿角市／縄文時代 **収蔵庫**

環状列石で著名な縄文時代後期の遺跡。注口土器は優品として知られる。

**群馬県：岩宿遺跡** みどり市／旧石器時代

1949年の発掘調査で、日本列島に旧石器時代が存在することを初めて証明した。国指定重要文化財。

**埼玉県：砂川遺跡** 所沢市／旧石器時代

旧石器時代の石材の分配や、遺跡におけるヒトの行動を復元する研究の原点となった。国指定重要文化財。

**神奈川県：夏島貝塚** 横須賀市／縄文時代

貝殻などの放射性炭素分析で縄文時代早期の年代を明らかにした。尖底深鉢の夏島式土器、骨製の釣針など。国指定重要文化財。

**新潟県：燕鎚起銅器 湯沸し「南瓜形」** 燕市／2005年収集

加熱した一枚板の銅板を金鎚で打って立体に成形。注ぎ口の部分の絞り方が難しい。

**富山県：高岡銅器 一輪挿鑄銅製造工程** 高岡市／2001年収集

熔解した金属を鑄型に流し込んで成形。量産技法であるとともに繊細な凹凸の紋様表現が可能。

**福井県：越前打刃物 菜切包丁製造工程見本** 越前市／1985年収集

鉄鎚による鍛錬で鉄鋼の原子構造が変化して硬度・強度が増す。日本刀の製造技法を応用。

**山梨県：甲州北山筋湯村御検地水帳** 甲斐市他／貞享元年(1684) **収蔵庫**

検地役人「関新助」の署名がある検地帳。関新助は和算で有名な関孝和のこと。

**岐阜県：美濃焼 志野抹茶碗** 可児市／1996年収集

桃山の茶人に愛された日本陶磁史上初の白いやきもの。釉薬原料は長石という白い岩石。

**静岡県：今川仮名目録** 仮名目録は大永6年(1526)、追加は天文22年(1553)

東国で制定された最古の分国法。駿河国の戦国大名今川氏が定めた。当館所蔵本は、現存する写本の内、最も古いものの一つ。

**三重県：伊勢国亀山藩領絵図** 亀山市／元禄期 **収蔵庫**

元禄期(1688~1704)の国絵図作成にかかわる絵図。板倉家に伝来したもの。

**滋賀県：信楽焼 抹茶碗** 甲賀市／1992年収集

陶磁器の器種の中でも現在なお茶道具は最もステイタスの高いジャンル。

**大阪府：大坂御城絵図** 大阪市／江戸時代 **収蔵庫**

岩城平藩2代藩主内藤忠興は、幕府の役職である大坂城代を2度つとめた。

**兵庫県：姫路城 剣酢漿文軒丸瓦** 姫路市／江戸時代 **収蔵庫**

1749~1871年まで在城した酒井氏の家紋があしらわれている。前場幸治瓦コレクション。

今特集にて興味を持たれた収蔵品がありましたら、ぜひ展示室で探してみてください。さらなる新発見があるかもしれません!!

(展示室ではなく収蔵庫に納められており、ご覧いただけない収蔵品もございますので予めご了承ください。)

**和歌山県：紀州漆器 蟬色花瓶** 海南市他／1965年収集

色漆を塗り重ね、上層の漆を研いで下層の塗膜を表に出し景色(文様)を表現している。

**岡山県：備前焼 水指** 備前市／2015年収集

人間国宝の家系出身の作家作品。手仕事において作家名のブランディングは重要な要素。

**山口県：萩焼 湯呑** 萩市／1958年収集

萩は茶陶で知られるが、珪酸分を多く含む燻灰の白濁釉は半農半陶の産地に広く普及。

**徳島県：阿波正藍しじら織 着尺地** 徳島市／1999年収集

木綿の織地は通気性・保温性にすぐれる日常衣料生地。しじら織は通気性のよい夏向き。

**香川県：香川漆器 象谷塗盆** 高松市他／1960年収集

高度成長期には経済の好調により漆器など高級家庭用品の需要も伸びた。

**愛媛県：桜井漆器 惣菊彫硯箱** 今治市／1964年収集

塗膜に刃物で溝を切り、金を埋め込む。シャープな線の表現に向き、金時絵と併用も。

**大分県：伝・宇佐高校出土銅戈** 宇佐市／弥生時代

長い柄に装着し、鎌のように使う武器。血流しの溝である樋の先端がつながる九州型の特徴を示す。

**鹿児島県：鹿児島湾絵図** 文久3年(1863) **収蔵庫**

薩摩藩の支藩砂土原藩文書の内。薩英戦争時の鹿児島湾の防壁の様子を描いている。

**沖縄県：琉球漆器 堆錦蘇鉄文花瓶** 1963年収集

粘土状に半固化した漆を切り貼りして文様を表現。高温多湿の気候が可能にした技法。



公開特別講義 伝統的工芸品の経営とマーケティング Vol.11

## 工芸のサービスデザイン：アイデアの創造と編集 が開催されました

去る2016年11月25日、博物館と大学院商学研究科の共催、商学部の後援により他研究科・学部・院生・学生や一般社会人に門戸を開いた公開特別講義を開催しました。博物館の商品部門は商学部教員と共同し、2016年度からの3ヶ年計画で山陰地方の民藝陶器のマーケティング研究を開始しました。すでに現地調査にも取りかかっていますが、初年度ということもあり、まずは我々の身近なところでそれらがどのように販売されているか、都内の民芸品店に注目しました。その成果報告会としての特別講義には、中目黒に店舗を構える「工芸 器と道具 SML」のディレクター宇野昇平氏に講師をお願いし、また、宇野講師のご紹介で同店とコラボレートして商品開発やPR活動をおこなっている出西窯（島根県出雲市）の多々納真氏にお越しいただくことができました。



今回の講義においては、商品の企画から製造、PR、販売までの一連の動きをサービスデザインという観点から注目しました。SNSの発達によるオンライン上のバーチャルな展開を促進させると考えがちですが、ディスカッションの中では、通販を目的とするのではなく、むしろ商品に関わる情報発信によって店舗に買い手を誘う手段として活用しているというのが印象的でした。そして、実際に手に取って感触を確かめることはもちろん、料理を試食させるなどして器を体感してもらうなど、人と人の顔の見えるコミュニケーションを大切にしていることが報告されました。これは、作り手と売り手との間にも言えることで、商品というモノを動かすだけではなく、売る側が作る側の強みを理解して積極的に企画を提案するなどコミュニケーションを密にし、器が作り出された背景としての作り手の人となりや産地の気候風土など、器を取り巻く「スタイル」を商品の価値として提示することが使い手との関係づくり上、重要な要素となっていることが明らかになりました。

“民芸品”と言うと、その語感からは古民家の土産物店に並ぶ品物というようなイメージがありますが、内実は逆で、民藝の器が売られているのは、SMLのような若い世代を主なターゲットとするスタイリッシュな生活雑貨専門店なものでした。こうした現象が、現在、民藝の“静かなブーム”と表現されますが、そこには手作りの伝統工芸を再評価する重要な糸口があるのではないかと考えさせられました。

※この講義の抄録は『明治大学博物館研究報告』22号（2017年3月31日刊行予定）に収録されます。

### インフォメーション

## 明治大学博物館のFacebook ページ を立ち上げました

当館は都心に立地しており、しかも貴重な収蔵資料を擁する大学博物館です。土日を含め無料でご入場いただけます。このことを多くの方々に知らしめ、ぜひともご来場いただきたいとの想いからFacebookを立ち上げました。熱心な当館のスタッフが、展示やイベント、日々のニュース、さらにご利用いただく際に有効となる情報についてこまめに掲載しています。以下の当館Facebookページにアクセスしていただき「いいね」を押していただければ、継続して当館の最新情報をフォローすることが可能となります。

当館では、現状、年間7万人超のご来場者を集めていますが、就学世代およびシニア層の方が比較的多く見受けられるようです。当館の想いとしては、できる限り多くの方々にご来場いただきたく、スマートフォンをはじめとするウェブを利用されている若年から中高年の方々に対してFacebookページを通じてPRを行うことを企図しました。さらに、Facebookを利用することで当館の展示に興味を示す潜在ユーザに対して効果的な広告を打つことが可能となります。Facebookではユーザの嗜好について人工知能等により近距離の潜在的な顧客を抽出できるため、企画展の来場者が目に見える形で増えてきています。

学術研究・学習・観光の目的でも、個人・グループ・ご家族・カップルでも、楽しくご利用いただける博物館ですので、今後ともFacebookを通じて親しんでいただければと思います。さらにご来場の皆様におかれましても、Facebook等のSNSを介して、ご覧いただいた内容について「情報発信」をしていただければ望外の喜びです。

【当館Facebookページ】<https://www.facebook.com/meijimuseum/>



# 再葬墓と甕棺墓

## 弥生の墓の東西

忽那 敬三 (考古部門学芸員)

### 1. 展示の主旨

日本列島に米づくりが伝わった弥生時代(紀元前800または500年頃～紀元後250年頃)は、金属器の使用や卓越した力を持つ権力者の出現など、社会に大きな変化が起こった時代である。当時の墓の副葬品や棺から、亡くなった人物の集団における立場や、その集団の習俗などを知ることができる。弥生時代には多様な墓が造られたが、なかでも東日本の再葬墓と九州の甕棺墓は、際立った存在だ。再葬墓は、遺体を骨化させたあとに一部の骨を土器に入れて葬ったもので、甕棺墓は、専用の巨大な土器で埋葬した墓をさす。また、甕棺墓を中心に出土する中国製の青銅鏡は、大陸との交渉の存在や被葬者の身分のほか、墓の年代を知る手がかりともなる。明治大学は、文学部考古学専攻創設以来、弥生時代の墓制と鏡の研究に取り組んできた。今回の企画展では、当館が収蔵する関東の代表的な再葬墓出土資料と九州の甕棺、そして弥生時代並行期の中国鏡コレクションを一堂に展示し、東西の墓制の違いとその特徴、鏡の変遷と年代について紹介することを目的とした。会期は2016年10月22日(土)～12月18日(日)の58日間、展示資料は他館に長期貸し出し中の資料を加えた館蔵品146点である。

### 2. 再葬墓と甕棺墓

再葬墓の実態の解明は、明治大学教授であった杉原荘介氏(1913-1983)が中心となって考古学専攻が力を注いできた研究のひとつで、弥生時代に再葬墓が存在することを初めて明らかにした千葉県いずるはらの岩名天神前遺跡(写真1)や、国の重要文化財にも指定されている栃木県いづるはらの出流原遺跡など数々の遺跡を調査してきた。今回は、前期段階の再葬墓である茨城県殿内遺跡の再葬墓出土土器14点と出土人骨の一部、再葬墓の副葬品としては例が少ない石製の小玉を出展した。また、再葬墓遺跡調査の嚆矢として知られる群馬県いわびつ山遺跡(1939年調査)の土器についても、当館所蔵の9点全点が並んだ。そして、今回の展示の中心となったのが岩名天神前遺跡で、再葬墓出土土器21点と、土器から出土した人骨9点が並んだ。1964年の発掘調査以来半世紀が過ぎたが、これらが一堂に会したのは初めてのことである。岩名天神前遺跡の出土資料は常設展示室で公開しているが、第2号墓壙の土器4点と人骨数点のみが展示されているにすぎない。一度に資料を陳列したことで、岩名天神前遺跡の第1号墓壙や第2号墓壙のように、同一の墓壙内でも大きさや系統が異なる土器が使用されていること、また



写真1. 岩名天神前遺跡第1号墓壙(左)と第2号墓壙(右)出土の土器と人骨の一括写真。発掘調査以来、初めて集合写真の撮影が実現した。

岩名天神前遺跡と比較すると殿内遺跡の土器群が比較的小型の土器で構成されているなど、より具体的に様相を知ることができる。

一方、甕棺墓は1955年に日本考古学協会によって組織された特別チームが調査した際に出土した佐賀県桜馬場遺跡の甕棺3点と、寄贈資料の伝熊本県益城郡御船町出土の甕棺1点を展示した。写真2の桜馬場遺跡第1号甕棺は旧考古学陳列館時代に常設展示されていたが、今回修復した第2号甕棺の下甕とあわせ、収蔵している4点が一度に展示されるのは初めてのことである。特に桜馬場遺跡の資料は残存状態が良く、表面に塗布された黒色顔料や外表面の丁寧な仕上げを観察することができる。また、唐津湾周辺地域と熊本県中央部の作風の違いなども見て取ることができた。

### 3. 中国鏡の変遷と年代

当館所蔵の中国鏡コレクションは、毎年2〜3ヶ月ほど常設展示室で公開しているが、今回は特に弥生時代並行期の資料を中心として、岡村秀行氏らによる漢鏡編年をもとに、戦国期から漢鏡1〜8期まで各時期ごとに代表する鏡種を提示して推定される実年代もあわせて示す形とした。これにより、鏡の形状や文様の変遷はもとより、各鏡がいつごろの時期に相当するのかを視覚的に理解できるようにした。

### 4. 成果と意義

本展は、教科書でしばしば登場するものの東日本では目にする機会が少ない甕棺や中国鏡の実像、また東日本では身近な存在でありながらも知る機会が少ない再葬墓の全体像を提示したことで、反響は大きいものがあった。また、本学考古学専攻と当館が蓄積してきた研究と、質量ともに充実した収蔵資料を内外に周



写真2. 高さ約1mをはかる甕棺(桜馬場遺跡)。大きさや丁寧な表面の仕上げなど製作技術の高さに驚いたという感想が多く寄せられた。

知する良い機会でもあったといえる。さらに、外部の研究グループによる見学があったほか、今回の展示で使用したパネルや模型が外部団体のシンポジウムで再度活用されるなど、様々な形で研究活動にも貢献することとなった。館藏品展は、資料の修復や整理の契機となるとともに、新たに研究が進展するというメリットがある。今後も館蔵資料の積極的な公開を進めていく所存である。



写真3. 今回出展した中国鏡の一部。上段左から山字文鏡(A-97)、草葉文鏡(A-107)、異体字銘帯鏡(日光鏡,A-98)、下段左から夔鳳鏡(A-208)、方格規矩鏡(A-93)、神人車馬画像鏡(A-246)。戦国代の山字文鏡から三国代の神人車馬画像鏡へ、鈕が大きくなり文様が変化していく。(縮尺不同)

# 伝統的工芸品の現代マーケティング

## — 商品としての将来性と分業体制について —

上原 義子 (嘉悦大学経営経済学部専任講師  
明治大学博物館研究調査員・商学部兼任講師)

### 文化として、商品として

日本人にとって日本の伝統的工芸品は文化や個性を象徴するかけがえのないものである。とは言え、日々の生活でこれらを身近な用具として手軽に使いこなすことはそうたやすいことではない。こうした傾向をうけて、伝統的工芸品は産業としても日ごとに縮小しており、後継者育成、技術の伝承などさまざまな面において深刻な問題をかかえている。

本稿では、日本らしさの象徴であり、歴史文化の連なりともいえる伝統的工芸品に対して、「商品」としての可能性について経営やマーケティングの視点から考えてみたい。従来、伝統的工芸品というと、真贋、美術、骨董といった「文化」的視点から取り上げられることが多く、使い手の視点を加味して考察されることはあまりなかった。ここでは明治大学博物館商品部門にちなんで、商品の側面から、伝統的工芸品の将来性を検討したい。

### 伝統的陶磁器の生産と流通

伝統的工芸品の生産は、従来は農業の閑散期に、農民たちが生活の一助として細々と担う家内制手工業が主体であった。たとえば有田焼は、佐賀藩主導のもとで小作人らが農業の副業として生産してきたもので、藩の殖産としての一面もあった。生産は基本的に分業であり、一農家が大量生産することはなく、(一農家には機械導入に見合うだけの生産量や資金もなかった)藩や卸の支配下であって、自分が手掛けた仕掛品が最終消費者にどのような形で渡るかもわからず生産していた。

陶磁器の作り手に、商品の最終的な販売形態や消費者の姿が見えにくい産業構造は、現在でもそれほど変わっていない。陶磁器産業は(伝統的工芸品の多くがそうだが)基本的に中小零細企業による分業で製造されており、土練り、絵付け、窯入れなどの全工程で、その工程だけを専門に扱う別々の人によ

て担われている。流通も同様で、窯元、産地卸、消費地卸、小売店による社会的分業体制が基本である。こうした状況下で、各担い手にある唯一の共通認識は、自分たちのアイデンティティは伝統であり、その伝統にこれまで守られ、そしてこれからも守っていくことが使命と考えている点である。

### 伝統的陶磁器の分業制とマーケティング課題

しかしながら、マーケティング的見地に立てばこれは製品志向の足踏み状態で、顧客ニーズを二の次にしている点で時代遅れの感が否めない。生産者や販売者側が自負する技術・伝統は、現代の消費者にとっては区別的手段でしかなく、差別的優位性には及んでいない。ブランド戦略で海外メーカーの後塵を拝していることがその証左であろう。

日本の陶磁器メーカーが顧客ニーズに疎く、ブランド戦略も立ち行かず、現代マーケティングが後手に回った要因の一つに、先に示した分業制を指摘できる。たとえば有田焼は、佐賀藩の国産品であった頃から分業制で、その当時は家内制手工業として、作り手の貨幣資本や原料の調達は商人に依存しており、生産の分業工程も一部のみを請け負い、流通は完全に商人に独占され、作り手は販売市場から遮断されてきた。そのため生産者は卸より弱い立場にあったが、それでも卸の



下給付の済んだ半製品 (写真は本文と関係ありません)



もつ一括販売による費用軽減効果にひかれて、分業制は連綿とつづいてきた（下平尾1978、山形2008）。

だが、当該産業をとりまく外部環境で起きたここ数十年の変化（ライフスタイルの変化、情報革新、廉価品の台頭など）に鑑みると、今ではその分業制が産業全体で自縄自縛となっている。すなわち、消費者需要が減退してモノ

が動かない時代にあっては、顧客ニーズを基に定めた軸に向かって関係者すべてが折れ合う必要があるのに、分業体制が生んだ人間関係の機微がそれを阻んでいるのである。



有田焼の卸団地（佐賀県有田町）



有田焼「匠の蔵」シリーズ  
（博物館特別展示室での展示から）

しのように衰退する構造である以上、やはりここにも卸の意義再考の必要性を指摘できる。

## 現代マーケティングにおける卸の役割

では、伝統的陶磁器産業が現代マーケティングを実践するために必要なことは何か。この答えの一つとして、卸の存在意義の再考を主張したい。卸が存在することで取引総数が極小化される、卸が集中的に在庫を貯蔵することで取引コストが削減される、などの効果がいわれており、たしかにこれまでのような好景気という時代の追い風を受けている場合には、単に商品を右から左に流しているだけでも重宝されたであろう。

しかしながら、近年の加速度的技術革新をうけて（交通の発達、生産技術や生産構造の変化など）、卸の必要性は多くの局面において減じてきた。それでもなお今も卸に求められている役割は、分業によって分断されている体制を取りまとめて擦り合わせる、プロデューサーとしての役割である。たとえば、伝統的陶磁器の製造には技術力が必要で、各窯元によって得手不得手があるので、顧客ニーズに最善手で答えるためには、それに最もふさわしい妙手を割り当てる必要がある。また、和食器のように種類や使い方が多種多様な場合には、点在する窯元から収集したものを分散させるにあたって、顧客ニーズにあう品揃えに組み替える必要がある。そのときに一つの軸になるのが、卸の持っている情報と専門知識である。こうしたノウハウによって、産地と消費地をつなぐことができるのはまさに卸の強みであり、これからも活躍が期待される場である。

また、卸の衰退は、卸固有の問題にとどまらず産業全体の地盤沈下をも引き起こすことに留意したい。産地は基本的に消費地とは離れたところに形成されているので、生産者は消費地で沸くニーズを流通業者から聞き取る以外に術がない。ゆえに、顧客ニーズが生命線である現代において流通が機能しないことは、マーケティングの実行可能性を否定されるのと同義である。卸の衰退が引き金となって産業全体がドミノ倒

## 卸に求められる創造力

ここまでの議論で、分業体制の弊害、卸の在り方の再検討と再構築を唱えてきた。本稿のまとめとして、これらを改めて現代マーケティングに照らすことで一つの指針を示したい。現代マーケティングでは、顧客志向に基づいて製品、価格、流通、プロモーションをミックスして「組み合わせの妙」を創造することが肝要とされる。今の卸に求められていることは、単なる商品の収集、分散だけでなく、その組み合わせの妙をいかに生み出すか、そうした知的生産技術なのである。人間にしかできない創造的な姿勢が今後は求められるであろう。

かねてより、卸の現状を揶揄して「仕事はなくなるが会社はなくなる」といわれてきたが、現場では新しい動きが見え始めている。たとえば有田焼の「匠の蔵」シリーズは、窯元と商社の製販協働で達成された企画である。長らく慣習とされてきた「窯元は製品を作るだけ、商社は売るだけ」という固定概念が払拭され、消費者ニーズに寄り添った究極の作品作りに向かって、製販協働で邁進する姿勢は、古い慣習に縛られがちな伝統的世界においては、単なるコラボレーションを超えた深い意味を持つ。

様々な産業において、AIやロボットの可能性がささやかれるようになり、オックスフォード大学のオズボーン氏によって「あと10年で消える職業」などが示されるようになった。たしかに、効率化のみを追求すれば卸の仕事もAIやロボットにとって代わられるであろう。だが、消費者という「人」を相手にする以上は、「人」だからできる創造的な知的生産技術が常に求められる。それに応えていくことが今後は鍵になるに違いない。

### 【参考文献】

- ◆下平尾勲『現代伝統産業の研究』新評論、1978
- ◆山形万里子『藩陶器専売制と中央市場』日本経済評論社、2008

# 転封こぼれ話

## ～旅立つ人、残る人、涙の別れ～

日比 佳代子 (刑事部門学芸員)

延享四年（1747）三月十九日、幕府は、内藤政樹陸奥国磐城平七万石、牧野貞通日向国延岡八万石、井上正経常陸国笠間六万石の三方領地替を命じた。この転封によって、内藤家は磐城平から延岡に引き移る事になった。磐城平の周辺は幕府領や譜代領が多く、転封の多い土地だが、内藤家が上総国佐貫から入封して既に百二十五年経っていたので、内藤家やその家臣達は、自分たちが転封するとは考えていなかった様である。転封を知らせる江戸からの手紙には、長い間転封がなかったので、大騒ぎになるだろうが何とか取り鎮める様に、と書かれており、その事が窺える。

延享四年の内藤家の転封については、2009年度特別展『大

名と領地 お殿様のお引越し』や、論文「転封実現過程に関する基礎的考察」（『明治大学博物館研究報告』第16号、2011年）で考察した。幕府や牧野家・井上家とのやりとり、家臣達の実際の移動の様子は、上記を参考にしてもらおう事にして、ここでは、磐城平から延岡への転封に伴う二組の武士家族の別れについて紹介しよう。

転封といっても、歩いてその日の内に移動できる距離のものもあれば、何日もかかる様な遠方への移動もある。幕府から転封の命が下されると、近国なら三ヶ月後、遠国なら四ヶ月後に、新領主と旧領主は城と領地を交換する。その日までに、家臣達は藩の荷物をまとめて城から送り出し、自分たちの住んでいる家の

荷物もまとめて送り出し、家族を連れて新領地に向けて旅立っておかなければならない。内藤家の磐城平から延岡への転封は、超がつくほど遠方への移動であり、大変な苦勞があった。内藤藩の家臣達は水戸街道経由で千住へ出て、板橋から中山道の木曾路を歩き、伏見から大坂まで川船を使い、大坂からは船で瀬戸内海を進み延岡に向かった（なお、藩主はこの時、江戸にいるため、移動するのは家臣とその家族のみである）。幕府からは、宿場に負担がかからない様に、分散して移動せよと指示が出ているので、家臣達が一斉に移動する様な事はできない。宿の手配、船の手配、関所通過など各所手配の都合があるので、藩の方で移動人数・日程を組み、藩士達はそれに従って、毎日少しずつ磐城平を出発するのである。

転封にあたって、大名は自分の家臣はすべて新領に連れて行かなければならない。引越し費用は藩がある程度支給するが、ついてこない（ついていく事ができない）藩士もあり、その場合は暇を取らせる事になる。藩は財政上の理由から、召し抱えて数代の藩士（多くの場合下級藩士）はある程度召し放っ



延岡城下家中屋敷割図（『内藤家文書』3-23-11-35-5）  
延享四年の国替により以後内藤家の居城となった。

た方がよいと考えているが、藩の核となる上中級家臣が、遠国への転封を嫌って御暇願いを出す様な事になりはしまいかと警戒している。実際に、延岡行きを避ける為に、何とか江戸勤めになれないものかと画策する者も出ており、藩側はこれを厳しく批判している。ただ、現実的な問題として、家族に高齢の親や病身の者がいる場合、彼ら、彼女らが移動に耐えられないため、連れて行く事が出来ないという問題が生じた。転封の命が下ってひと月もすると、この問題に関する願書が出される様になる。

その中からまず、荻野数右衛門の事例を紹介しよう。荻野数右衛門は、父金兵衛が元禄十三年(1700)に内藤家に新規に召し抱えられた新参の家臣で、初十五俵二人扶持の切米を下されている下級藩士である。磐城平時代の数右衛門の仕事は、勘定所など財務系の仕事が多い。転封にあたって、大坂御先御用を命じられた加藤勘兵衛の下役として、大坂で仕事をする事になる。このような重要な局面で下役として大坂に派遣されたところをみると、数右衛門はかなり有能な人物だと言えよう。

しかし、数右衛門は問題を抱えていた。年老いた両親と病気の妻がいたのである。数右衛門は、「両親共に高齢で遠国への移動は難しい。妹が二町目酒屋庄兵衛方へ縁付いているので、庄兵衛方で両親を引き取りたい。また妻も眼病なので養生させたく、一、二年の間、庄兵衛方に両親と一緒に引き取りたい。」と、藩に願い出ている。史料中では、数右衛門は両親の事を「極老」と表現している。父親の金兵衛は元禄十三年に召し抱えられている。新規召し抱えなので、ある程度の年齢だったはずであり、若くみつもって二十代後半で召し抱えられたとしても、延享四年段階で七十歳を超えていたと考えられる。今の様に交通手段が発達していない江戸時代、確かにその年齢では、磐城平から延岡への移動は難しかっただろう。数右衛門は両親を磐城平に残していくしかなかったのであり、藩はこの数右衛門の願いを許している。

この事例には興味深い点がある。下級とはいえ武士である数右衛門の妹が、町人である酒屋庄兵衛方に縁付いているという事(注1)、この妹が、実家の父母と義姉を、“嫁ぎ先”に引き取ると言っている事である。父金兵衛の履歴をもう一度確認してみると、元禄十三年に召し出されて金兵衛が最初に勤めた仕事は、「御酒部屋御役」である。酒屋庄兵衛方・・・、御酒部屋・・・、「酒」という共通点がある。金兵衛は新規召し抱えであるから、以前は町人か百姓だったと考えるのが順当だろうから、この符合は、①もとは酒屋だった金兵衛が、藩に召し抱えられ、元町人としての素養を生かしつつ御酒部屋の仕事をを行ったのではないか、

②数右衛門の妹が酒屋庄兵衛方に縁付いているという表現になっているが、むしろ逆で、金兵衛と息子の数右衛門が武士になったので、酒屋の方は娘に婿を取らせて経営させているという事ではないか、と思わせるのである。この様な解釈が成り立つとすれば、隠居した金兵衛夫婦は、もともと馴染みのある環境で、娘夫婦と共に余生を全うできる事になったということである。

数右衛門は下級藩士であるが、上級藩士からも同種の願いが出されている。藩主一族の家老内藤治部左衛門家の分家である内藤舎人が、磐城平に残りたいと願い出ているのである。舎人は禄高六百石の大身家臣、一時は組頭も務めていたが、延享三年正月に病気のために隠居し、家督を息子の主税に譲っている。舎人は、自分は眩暈(めまい)の病気があり、妻も病身であるため、長い海上移動や遠路の移動が覚束なく、この状態で行けば道中息子の厄介にもなり費用も多くかかるからと、磐城平に残る事を願い出ている。城下ではなく、町在に住み、武士をやめて名前を改め、息子の援助も一切受けない、「此度夫婦共死去仕候心底ニ相決」(今回、夫婦共死んだと思って決めました)と、その願いは必死なものだった。

この舎人の願いは受け入れられるが、舎人が自ら申し出たとおり、武士をやめ、紋所も改め、名字を捨て、江戸の近くや磐城城下三里四方に居住する事も許さないという厳しい条件が付けられた。さらに、息子の主税には、父子の間を絶つ事を命じ、文通なども堅く禁じると申し渡している。藩としても、隠居したとはいえ藩主一族の大身家臣が延岡に赴かない事による藩士への影響・士気の低下を懸念して、厳しい条件を付けなければならなかったのだろう。また、磐城平領は新領主井上家のものとなるので、舎人が磐城平に住み続けるのであれば、井上家の領地に内藤家の家臣を残していく—それも藩主一族を—という事になるので、武士としての身分を捨てさせる必要があったのである。とはいえ、息子と手紙のやりとりさえ禁じられるとは。どの様な思いで舎人夫婦は、息子の主税の旅立ちを見送ったのだろうか。

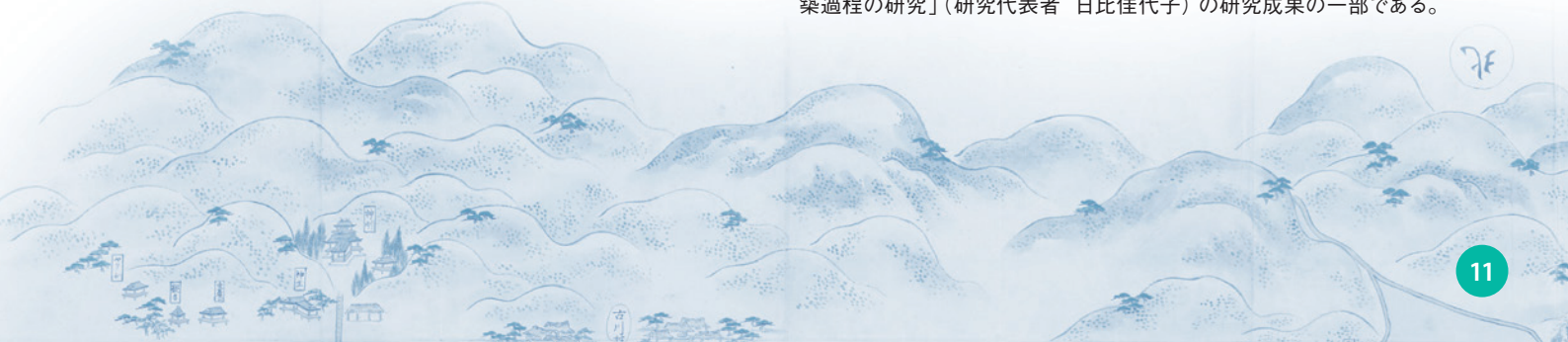
注1) 勿論、江戸時代には有力な百姓や町人の身分上昇への働き掛けは絶えず行われており、百姓や町人が下級武士になったり、娘を下級藩士に嫁がせたりする事自体は珍しい事ではない。

史料 1-20-312「奥州岩城より日州延岡江御所替二付萬留書」(『内藤家文書』明治大学博物館蔵)

1-30-2「古由緒書」(同上)

1-30-70「御家臣内藤家覚書」(同上)

本文章はJSPS 科研費26770230「転封大名の新領における「藩」構築過程の研究」(研究代表者 日比佳代子)の研究成果の一部である。



## 前場幸治瓦コレクション 飛鳥時代の瓦②

日本の瓦作りは、6世紀末の飛鳥寺の造営を契機に始まります。飛鳥寺は崇仏派の蘇我氏によって建てられた日本最古の寺院ですから、本格的な仏教信仰に伴って、他の様々な寺造りの技術と共に、瓦作りの技術が大陸から入ってきたと考えられます。『日本書紀』崇峻元年（588）の記事には、朝鮮半島の百済から瓦作りの技術者が渡来したと記されており、事実、飛鳥寺の軒丸瓦の文様は百済のものと同様です。

飛鳥寺に続き、聖徳太子と関連のある法隆寺若草伽藍や四天王寺、そして百済大寺（吉備池廃寺）・山田寺・川原寺などの寺院が次々と建立されます。

これらの寺院の軒丸瓦に注目してみると、まず飛鳥寺では、中国の南朝を起源として百済・新羅に伝わった「素弁蓮華文」と呼ばれる文様が描かれています。次に、百済大寺（吉備池廃寺）や山田寺では「単弁蓮華文」（写真1）が採用されますが、これは中国・朝鮮での例がなく、仏像の光背や台座の文様との共通性が指摘されています。そして、川原寺で「複弁蓮華文」が登場します。唐を起源にしていると言われますが、蓮弁の表現方法や外側に鋸歯文が入るなどの違いも見られます。つまり、素弁→単弁→複弁と、蓮の花の表現方法がシンプルなものから華やかなものに変化するのですが、この違いは、寺院研究においては造営年代を探る上での考古学的指標として扱われており、重要な意味を持っています。

素弁蓮華文軒丸瓦をもつ寺院は、大和国を中心に日本

各地に点在しますが、それらは日本最古段階（6世紀末から7世紀前半）の寺院と判断されます。単弁蓮華文軒丸瓦をもつ寺院は、文献から山田寺が舒明13年（641）に蘇我倉山田石川麻呂によって発願された寺であることがわかるため、7世紀中頃から後半にかけて建てられた寺院と捉えられます。複弁蓮華文軒丸瓦については、齊明天皇の川原宮（655～656年）を寺としたことに始まる川原寺のものが初出で、ここを年代の上限とすることができますが、その後の藤原京・平城京内の寺院などでも使われ続けます。

藤原京内には本薬師寺・大官大寺をはじめ、24もの寺院があったといえます。本薬師寺の軒丸瓦（写真2）は非常に美しい複弁蓮華文軒丸瓦で、日本初の瓦葺き宮殿である藤原宮の軒丸瓦のモデルとされました。また特筆すべきは、この時期、軒丸瓦と組んで葺かれる軒平瓦にも文様が描かれるようになったことです。それまで重弧文と呼ばれる横線が引かれるのみだったものから、藤原宮や大官大寺の軒平瓦（写真3・4）のような唐草文様をもつものとなりました。さらに、藤原京内24カ寺のひとつと考えられている石川廃寺（石川精舎推定地）についてですが、この寺の軒丸瓦と同様の文様をもつ軒丸瓦が、神奈川県千代廃寺で使用されています。瓦の文様が同様という事実は、その寺院間、すなわちそれぞれの造営主体に何らかの関係があったことを示唆しています。

（森本 尚子）



写真1: 単弁蓮華文軒丸瓦 (海会寺 ※吉備池廃寺と同範)



写真2: 複弁蓮華文軒丸瓦 (本薬師寺)



写真3: 偏行唐草文軒平瓦 (藤原宮)



写真4: 均整唐草文軒平瓦 (大官大寺)

# 記念館前遺跡出土の肥前産「京焼風陶器」



写真1: 丸碗（左下はいずれも高台内側の印銘）



写真2: 平碗



写真3: 平碗

駿河台の地には、かつて多くの武家屋敷が立ち並び、文献・絵図等の記録によると、本学のリバティタワーの辺りには禄高四千石の中坊家を中心とする旗本屋敷があったことがわかります。1995～96年にかけて行われたリバティタワー建設に伴う発掘調査では、中坊家屋敷の表門に接して建てられた長屋部分（家臣達の住居）の遺跡が発見され（明治大学記念館前遺跡）、中坊家の家臣団の生活空間が考古学的に確認されました。

明治大学記念館前遺跡出土の遺物には、陶磁器や漆器をはじめとして、銭貨・ままごと道具・胞衣容器など多種多様な生活用具が含まれており、なかでも陶磁器は肥前や瀬戸・美濃などの国産品のほか、中国・朝鮮半島で生産されたものなど、多彩な様相を呈しています。今回は、こうした陶磁器の中から、肥前産の「京焼風陶器」とよばれる陶器について紹介します。

京焼風陶器は17世紀後半から18世紀前半にかけて、肥前（現在の佐賀県と長崎県の一部）で生産されました。緻密で黄色味をおびた白色の土を使い、呉須（酸化コバルトを含む藍色顔料）や鉄絵によって「楼閣山水文」とよばれる塔に山や川などが添えられた風景文様が描かれているのが特徴です。さらに特記すべきは、高台（碗や皿の底につける円環状の台部）内側に「清水」などの印が押されていることです。印銘を施す習慣がそれまでの肥前陶磁器にはみられなかったこと、京都の窯名である「清水」印が多いことから、京焼の影響を強く受けたものと判断され、京焼風陶器と名付けられました。

写真1～3は明治大学記念館前遺跡出土の京焼風陶器です。火災等による二次焼成を受けて釉調が変色しているものもありますが、いずれも緻密で白っぽい胎土で、丸碗は胴部外面に、平碗は内面の底に呉須で楼閣山水文が描かれています。底部外面の高台内側には草書体の「清水」印（写真1・3）や、記号のような印（写真2）が押されており、いずれも「京焼風陶器」の特徴をよく示す資料といえそうです。

ではここで、京焼風陶器のモデルとなった本家京焼に少し目を向けてみましょう。17世紀後半以後、各地の消費地遺跡から京焼が出土するようになりますが、大半は丸碗と平碗で、緻密な胎土に白濁した灰釉がかかり、丸碗は胴部外面に、平碗は内面の底に繊細な筆致で草花文が描かれ、印銘を持つという特色があります。

さて、これを踏まえ改めて京焼と京焼風陶器を比べてみると、確かに胎土や器形、文様の位置や印銘を施す点などは似ていますが、一方で文様が大きく異なっていることに気が付きます。本家京焼が草花文を中心とするのに対して、肥前の京焼風陶器は楼閣山水文を採用しているのです。ここに、京焼を念頭におきながらも、それを丸写しするのではなく、独自の製品として再編していった肥前陶工の創意工夫を感じ取ることができます。

ところで、写真1の楼閣山水文ですが、写真2・3と次第に雑になってきているとは思いませんか。写真1は左の塔や中央の山並みが見て分かりますが、写真3になると何の模様か理解できないくらい簡略化されています。手抜きと言ってしまえばそれまでですが、量産するためには装飾の簡略化が必要だったと考えられています。つまり、これもまた肥前陶工の工夫の一つと言えるかもしれません。

（岡地 智子）

## 【参考文献】

- ・ 明治大学考古学博物館 2000年『明治大学記念館前遺跡』
- ・ 大橋康二 1990年「いわゆる京焼風陶器の年代と出土分布について」『青山考古』第8号 青山考古学会
- ・ 角谷江津子 2016年『近世京焼の考古学的研究』
- ・ 岡佳子 2011年『近世京焼の研究』
- ・ 熊谷市立江南文化財センター 2004年「京焼写し」『熊谷デジタルミュージアム』<http://www.kumagaya-bunkazai.jp/museum/dokusyo/koramu/utusi/utusi.htm>

新たに第3期3ヶ年の交流協定が締結された1年目は、  
第2期の交換展示と関連のギャラリートーク、  
在学生を対象とする特別講義に加えて博物館教育論に関する研修会が実施されました。

### 博物館教育論に関する合同研修

博物館展示手法の開発を目的に、国内外を舞台に博物館運営のコンサルティングで活躍されているLearning Innovation Networkの黒岩啓子氏を講師にお招きしました。「博物館教育の理論と実践」というテーマで両館の学芸担当者が参加した研修は、まず6月27日に南山大で「1：展示・教育プログラムの企画と運営」として見学者の行動特性やコミュニケーションモデルのあり方などの理論を、続いて7月27日に当館でおこなわれた「2：実践から評価まで」ではアンケートやインタビューなどによる来館者調査の理論に関する座学と、常設展示室に出て展示中の解説文を相互評価するワークショップをおこないました。研修の成果を今後の展示企画に生かしてゆきます。

### 特別講義

10月26日には南山大学人類学博物館で「祖先の暮らしを知る一地方古文書から見えてくるもの」(講師：学芸員外山徹)と題して講義をおこないました。江戸期の幕藩領主による文書行政について説明するとともに、表向きの事情が記された行間から人間味のある庶民の生活感覚を導き出しました。11月4日には南山大学人文学部黒沢浩教授が学芸員養成課程の講義「博物館実習」の一環として、「他者の展示は可能なのか?」と題し、南山大の主要なコレクションである民族誌資料を事例に講義をおこないました。異文化に対する評価において外部者の恣意性に発する問題は、特に民族誌資料に顕著に表れたものですが、展示物をどのように見せるかという点で普遍的な課題と言えます。



古文書の実物を交えながらの特別講義  
(南山大)



黒沢教授と学芸員養成課程矢島雄教授による  
ディスカッション(明治大)

### 収蔵資料交換展示

今年度は10月1日～11月6日の会期で、「交錯する視線—文化人類学者 西江雅之の「歩き方」—(明治大会場)、「はにわのまつり—玉里舟塚古墳の埴輪の世界—(南山大会場)」というテーマで両館を特色付ける資料を展示しました。



南山大会場の大型埴輪の展示



玉里舟塚古墳の埴輪についてのギャラリートーク  
10月8日(南山大)



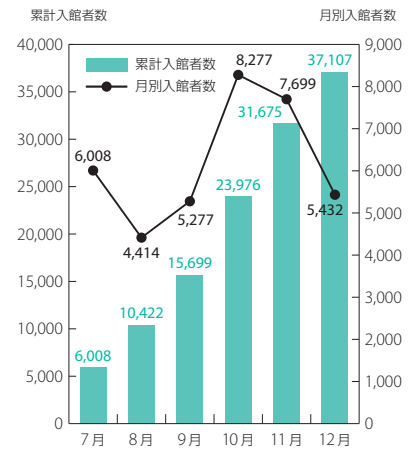
西江コレクションについてのギャラリートーク  
10月22日(明治大)

## 博物館入館者数の動き (2016年7月～12月：延べ人数)

2004年4月以降の  
総入場者数累計 **840,177人**

7月～12月	延べ人数
図書室利用者数	3,202
教室等利用者数	1,531

特別展示室来場者内訳		開催日数	来場者数
7/28～8/28	備前焼の新たな価値創造／メディアとしてのカルタ	25日間	1,247
9/3～10/16	江戸から東京へ ―錦絵に見る日本近代の曙―	44日間	2,871
10/22～12/18	再埋葬と甕棺墓 ―弥生の墓の東西―	58日間	5,887



## 団体見学の記録 2016年7月～12月

※事前に見学のお申し込みをいただいた団体のみ掲載しております。

- 【一般】 明治大学校友会羽村地域支部 (9名) / 朝日生命保険相互会社 (15名) / みどりヨコハマ人クラブ (16名) / 生き生き塾 (13名) / 地下鉄OB会 (車両部) (4名) / NHK文化センタービデオ教室 (10名) / 目黒万葉集愛好会 (15名) / 大学行政管理学会 (16名) / NPO法人新現役ネット (20名) / クラブツーリズム 東京新発見旅 千代田区 (110名) / 田道万葉集の会 (22名) / 公益社団法人松戸青色申告会 (40名) / 市友会 (50名) / 入間・比企地区人権教育推進協議会 (23名) / 埼玉市シニア大学東浦和校 (18名) / 沼津地区保護司会 (49名) / 神奈川県立歴史博物館ボランティア金曜班グループ (14名) / 茨城県立那珂高等学校PTA (40名) / 佐倉市岩名天神前遺跡公開シンポジウム実行委員会 (22名) / 世田谷区退職者互助会けやき友の会 (25名) / 長和町民大学キャンパスツアー (15名) / 愛媛県人権教育協議会 (14名) / 東柏会 (43名) / 稲毛会 (15名) / いきがい大学伊奈学園25期健康福祉科 (24名) / 上尾法人会上尾支部 (50名) / 千代田区立日比谷図書・文化館 (20名) / 多摩カレッジ (30名) / 陸上自衛隊幕僚監部法務官 (20名) / ナルク市川 (25名)
- 【小・中学校】 明治学院中学校 (42名) / 千葉大学教育学部附属中学校 (33名) / 明治大学附属中野中学校 (20名) / 杉並区立高南中学校 (12名) / 立教新座中学校 (29名) / 松戸市立小金中学校 (26名) / 文京区立根津小学校6年生 (46名) / 府中市立府中第八中学校 (6名) / 江東区立深川第五中学校 (31名)
- 【高等学校】 太田市立太田高等学校 (39名) / 星槎国際高等学校 (19名) / 海星高等学校 (15名) / 石川県鹿西高等学校 (40名) / 長野県上田梁谷丘高等学校 (43名) / さくら国際高等学校 東京校 (25名) / 茨城県立北海道第一高等学校 (42名) / 長野県松本美須々高等学校 (27名) / 文華女子高等学校 (38名) / 長野県丸子修学館高等学校 (10名) / 水戸女子高等学校 (20名) / 東京都立荒川工業高等学校 (52名) / トキワ松学園中学校高等学校国際交流部 (10名) / 埼玉県立小川高等学校1年5組 (42名) / 高岡第一高等学校 (70名) / 静岡県立磐田西高等学校 (43名) / 長崎県立西陵高等学校2年生 (42名) / 鹿児島県立武岡台高等学校 (120名) / 長野県豊科高等学校 (40名)
- 【大学・大学院・専門学校】 駒澤大学 竹中智香ゼミ (9名) / 明治大学法学部 law in Japan program (20名) / 和光大学附属梅根記念図書・情報館 (18名) / 國學院大学地方史研究会 (8名) / 駒澤大学 竹中智香ゼミ 新入生演習 (17名) / YMCA東京日本語学校 (18名) / タイ・マヒドン大学 (12名) / 二松学舎大学博物館講座 (20名) / 東京医科歯科大学 (20名) / 共立日語学院 (6名)

## M2カタログ

大好評!

## 明大記念館ポストカード再販開始!!

好評のうちに完売した、明大記念館(ヨコ)のポストカードの再販を開始しました。

記念館は現在のリパティタワー竣工前、1928～95年もの長きにわたり位置していた、明大のシンボルとも言うべき建物でした。蒼く澄み渡る空に、堂々とそびえ立つ記念館。

ポストカードは1枚90円とお手頃なので、来館の記念やご家族・ご友人へのお土産にぴったり! また、5枚ご購入頂くごとに、1枚サービスも行っております。



## 図書室管理ボランティア募集

明治大学博物館友の会は、博物館のサポートとより良い生涯学習を願う人の集まりです。2016年12月末現在550名余の会員を擁し、各種活動を活発に行っています。

博物館友の会では現在100余名の方が各種ボランティア活動に参加しており、同活動を通していろいろな方との出会いと自己研鑽に励んでおります。今回はそんな活動の一つである図書室管理ボランティア募集についてのご案内です。

### ■ 博物館図書室管理ボランティアについて

明治大学博物館の図書室には主に発掘調査の報告書、考古・刑事・商品部門に関する一般図書、全国の博物館の図録等があり、学内外の方に広くご利用いただいております。

ボランティアの方が博物館図書室利用者の入退室の受付と案内をしております。また、受付の間には図書室所蔵の本を自由に読めることもこの活動の魅力の一つです。ボランティアの一人は膨大な自分の書齋が御茶ノ水にあると表現されています。活動日は月～土曜日の午前担当は9時50分～13時まで、午後担当は13時～16時30分の二交代制（午前・午後両方参加も可）月に1回程度の参加になります。ボランティアへの参加は希望をとって、都合の良い日に参加していただいております。

ボランティアに参加される方は博物館友の会の会員になっていただきます。友の会会員は年6～8回開催されます友の会主催の講演会参加費無料、明治大学図書館書籍の閲覧等の会員特典があります。

募集は常時受け付けております。下記連絡先までご連絡ください。

### 明治大学博物館友の会 連絡先

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1 明治大学博物館気付 博物館友の会  
メールアドレス：[meihakutomonokai@yahoo.co.jp](mailto:meihakutomonokai@yahoo.co.jp)

※博物館に友の会の担当者は常駐しておりません。連絡は必ず「ハガキ」または「Eメール」をお願いします。

詳しくは明治大学博物館に備えています「入会のご案内」「分科会のご案内」または明治大学博物館HPから「明治大学博物館友の会」の各項目を参照してください。

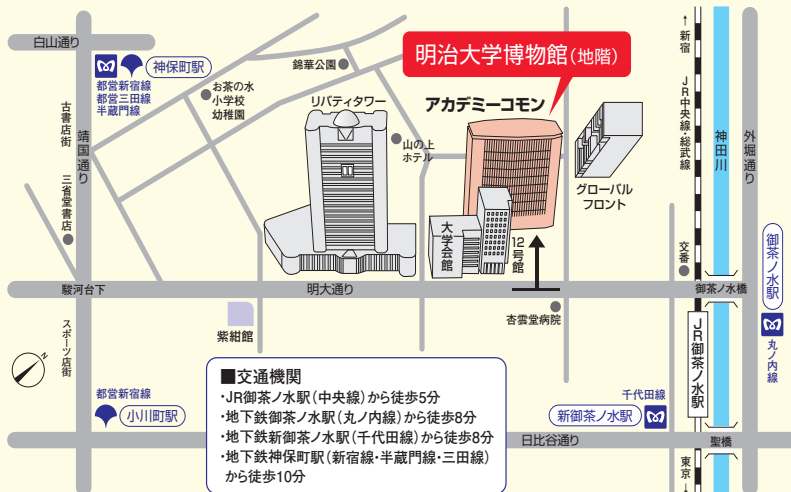
### 博物館案内

#### 展示室ご利用案内

- ◆ 開室時間  
10:00～17:00(入館16:30まで)
- ◆ 休館日  
夏季休業日(8/10～8/16)  
冬季休業日(12/26～1/7)  
8月の土・日に臨時休館があります。
- ◆ 観覧料  
常設展無料。  
特別展は有料の場合があります。

#### 図書室ご利用案内

- ◆ 開室時間  
月～土 10:00～16:30
- ◆ 閉室日  
日曜・祝日・大学が定める休日  
夏休期間(8/1～9/19)中の土曜日
- ※ 図書室はどなたでもご利用いただけます。
- ※ 蔵書は閲覧・コピーのみとなりますのでご了承ください。



### 編集後記

特集では、日本全国津々浦々の3部門の資料を紹介することができました。当館の収蔵品は長期にわたって収集したものやこれまでにご寄贈いただいた資料で成り立っています。これからも時代を超えて地域を越えて「人・もの・思い」の連携を深め、皆様に公開・発信していく所存です。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。